

心のバリアフリー

中 三

私には、「側弯症」という病気がある。この病気の最大の特徴は成長とともに背骨が変形していくことだ。成長期に発症することが多く、私が診断されたのは中学一年生のときだった。病気が進めば内臓が圧迫され、呼吸ができず最悪の場合、命に関わる。この病気を完全に治すことは難しく、進行を抑えるために背骨を固定する「装具」という矯正器具を体に取り付けて、私は生活している。装具は毎日欠かさず装着しなくてはいけないので、特に暑い夏が苦痛でたまらなかった。私の病気を知っているのはクラスでも特に仲の良い子だけなので、私は周りの目をとめても気にするようになった。それでも私が毎日学校に行くことができるのは理由があった。それは家族の協力と優しい先生方や友達に恵まれたからだ。装具を付けると重いカバンを背負うことが難しいため、学校の先生の許可を得て教科書などを教室に置いている。先生方はその他様々なことを快く聞き入れ、配慮し

てくれた。装具をしていると運動ができないため、保健の先生には、体育前後の装具の着脱をさせていただいている。友達も私が困っていると、優しく声を掛けてくれたり、「装具外せた？」などと私を気遣ってくれたりする。改めて、周りの人たちの温かさや優しさで胸がいっぱいになった。

しかし、幸せなことばかりではない。症状の辛さだけでなく、病気を理解してもらうのが難しいという苦しみがある。

私が教室に教科書などを置いておくことは事情を知らない人からすると「置き勉」となってしまふのだ。「なぜ」「ずるい」「ひいきだ」などと思われるかもしれない。みんなが大変そうにカバンを背負っている、なんだか胸が苦しくなる。

それから、中学三年生ということもあり、進路についても考えるようになった。私は学習や進学などに手厚い指導を受けることのできる高校に進学したいと思っている。しかし、インターネットなどで調べてみると、装具を付けている生徒への配慮が足りないと感じる。車椅子や怪我をした人に配慮したエレベーターやスロープのある高校はあるのに、保健室で装具の着脱や重いカバンに対して

の配慮は非常にまれなのだ。さらに、装具について説明したら、「最低限のことは自分でできないと困る」と冷たく断られてしまった人もいる。ネットの書き込みを見て、私はとても辛くなった。同時に「おかしい」という怒りが込み上げてきた。装具を付けているというだけで、夢まで諦めなくてはいけないのか。なぜ、ここまで追い詰められなくてはいらないのか。苦しくて悔しい気持ちで胸がいつぱいになった。

しかし、私はある「考え方」に救われた。それは「障害は身体の中ではなく外にある」という考え方だ。例えば私が重いカバンを背負えないのは、私が側弯症だからではなく、カバンが重いからだ。だから、「環境を改善していこう」と考えるのだ。この考え方に基づいて「障害者差別解消法」が施行された。たとえ、なにか「不可能」なことがあっても、個人の問題だと決めつけるのではなく、周囲が改善していくことで、それは「可能」となる。また、一人一人が相手を思いやり理解する姿勢、そして適切な配慮を心掛ければ、みんなが心地よく生活できる社会になるはずだ。ただ事実として受け取るのではなく、相手が抱える困難や痛

みを想像して共感しようとする。その力を培うことが私たちの生きる社会には必要だと思う。私を支えてくれる多くの人たちのように、私も誰かに優しく寄り添える人になりたい。「心のバリアフリー」を通して、誰もが同じように安心して生きる社会になることを私は強く願っている。